財団法人　松風会　会報

松門

No. 26
平成　10.8.4

・松陰敬仰の気運醸成
・松陰精神の継承普及
・松陰教学の研究振興

○編集発行　財団法人松風会
〒753-0072 山口市大手町２－18
山口県教育会館内 TEL 0839(22)1218

ふるさとを担う人づくり

山口県中学校長会会長
山口県中学校教育研究会会長
美東町立美東中学校
校長　木島俊太郎

行政改革、教育改革と改革の波が時を待たず押し寄せてきている昨今である。

地方分権、規制緩和は権限の委譲とそれにともない行財政基盤の整備が求められている。

山口県もこれらの動きに併せて、やまぐち未来デザイン二十一において「二十一世紀に自活できるたくましい山口県の創造」を県づくりの指針として示し、「人づくり」を四本柱の第一に掲げている。

一方教育においては、「山口県らしい教育」の展開を目指して、今回「山口県教育ビジョン」が策定され、その基本目標に『夢と知恵を育む教育』が提示された。

「山口県らしい教育」の推進は、新しい山口県の創造に求められる人材の育成に沿うものであり、今こそ県民をあげて教育を考えるときのように思う。

基本目標である「夢と知恵を育む教育」についてはすでに解説されているところであるが、「夢」は目標やビジョンであり、「知恵」はその目標に近付くための総合的な力であるともいえるのではないだろうか。

似たような語感として松陰先生の『志』と『至誠』を思い起こすことができる。

「志を立てて以て万事の源となす」「志」は目標であり、ビジョンともいえる。

「至誠にして動かざる者は未だこれあらざるなり」「至誠」は「志」をとげようとする姿勢、つまり、生きる姿勢であるといえよう。

いずれも精神性に重きをおいた指針である。

関ヶ原の合戦以降、防長二州に封じ込められた毛利藩は、怒りと屈辱に耐え、限られた土地と資源の中での自給自足を強いられた。

強靭な精神力と知恵こそがこれを乗り越える大きな要件であったことが伺える。

爾来三百年、毛利藩は「人づくり」を進めながら、その知恵を以て改革を繰り返してきた。

その結果、日本の歴史を大きく塗り替えた明治維新の原動力となるだけの人材の育成と財力を蓄えることができた。

それは、毛利藩の執念と長い歴史の中で培われてきた防長の教育風土に育った人々のなしえた偉業である。

自立・自活の条件整備が急務であるとき、この三百年の歩みには学ぶものが多くある。

今ふるさとが見直されつつあるが、その意義は大きい。生きていくための基盤になるもの（アイディンティティー）がしっかりして初めて大事がなる。

「萩城まさに大いに顕れんとするや、それ必ず松下の村より始まらん」「松下陋邨といえども誓って神国の幹とならん」

神国という言葉は時代にそぐわないにしても、意図するところは地方からの発信である。

山口県が自活を目指すとき、その傘下にある市町村の自立を軽視することはできない。

むしろ各地域の基盤がしっかりしてこそ県全体の安定が得られる。「自活・共生」はまさにその事を指している。

この時にあって、「ふるさとに根差し、ふるさとを担う人づくり」をすることが、教育に寄せられる大きな課題である。

各自治体が自分たちの地域の存亡を人づくりにかけていることを再認識し、地域と一体となって学校教育を進めていくことが新しい山口県づくりに寄与することになると思う。

第１回松陰研修塾自主研究コース第２年次開講（H10.5.23）

幕末の国際情勢と松陰の国際認識（その一）

元山口県立山口博物館館長
財団法人　松風会
理事　石原啓司

一、幕末の国際情勢

寛永十二年（一六三五）鎖国令の完成により、長崎の出島をオランダ・清との貿易の窓口として開く以外は、門戸を閉ざし、二百年の太平を維持した江戸時代であったが、その間に世界は大きな変貌をとげつつあった。

十八世紀後半に、イギリスで始まった産業革命は、十九世紀に入るとフランス・ドイツ更にアメリカにも波及し、世界的規模で資本主義が成立し、各国は競って海外市場の獲得にのりだして行った。

従って、十八世紀末以来、欧米の艦船が、日本近海に来航し、その中には、通商関係の樹立まで求めるものも現われた。

こうした、世界の情勢に対し幕府は、鎖国政策の堅持を国是とし、開国への準備は何一つしていなかった。

隣国の清がアヘン戦争（一八四〇～四二）で敗北し、イギリスの武力で開国を余儀なくされた情報は、長崎のオランダ・中国人を通して正確に伝えられていた。この衝撃は、幕府のみならず、各藩の指導層であった武士階級に影響を与え、外交問題に関する関心は次第に全国的に高まって行ったのである。

嘉永六年（一八五三）六月ペリー艦隊の来航は、鎖国日本に押し寄せた最初の大波であった。

軍事力を背景にした外国の脅迫により幕府の基本政策である鎖国を放棄することは、幕府の権威を傷つけるものであった。

従って、幕府は、諸大名の同意を得るために、開国か否かを大名から一般人まで広く諮問し、朝廷にも事情を報告し、国民的合意のもとに、日米和親条約の締結を図ろうとしたのである。

対外的危機の深刻化は攘夷論を高揚させたが、即時開戦を主張するものは少なく、幕府の避戦策は不本意ながら同意された。

二、吉田松陰の国際認識

若き日の松陰が、時代の動きに注目し、眼を広く世界に向けるようになったのは、山田宇右衛門と山田亦介の指導による所が大きい。

山田宇右衛門は、松陰の養父吉田大助門下の高弟として松陰の幼時は後見人として山鹿流兵学を教え、藩校明倫館では代理教授もつとめた。

弘化二年（一八四五）山田宇右衛門は「坤輿図識」（世界地理書）を松陰に贈り、世界の形勢に注意するよう指導した。

山田亦介は村田清風の甥で、吉田大助の友人であり、文武に通じた人物であった。

松陰は弘化二年十六才の時、山田亦介に入門し長沼流兵学を学んだ。亦介は兵学と共に、世界の大勢に着眼することを松陰に教えた。

安政五年七月、松陰は「山田先生に與うる書」の中で、西欧列強のアジア進出の状況を先生から説明をうけたが、当時はよく理解できなかった。現在（安政五年）わずか十三年しか経過していないのに、列強の進出を眼前にし、時世の変革の激しさに驚いていると誌している。

嘉永三年（一八五〇）二十一才の松陰は四ヶ月間の九州遊学に出発し、長崎を経て平戸で、猛烈な読書の日々をすごした。四ヶ月間に六十一冊を読破し、必要なものは抄録しているが、特にアヘン戦争（一八四〇～四二）の実態には深い衝撃を受けた。

翌年からの江戸遊学で佐久間象山の門に入門し、嘉永六年（一八五三）ペリー来航の衝撃を全身で受けとめることになった。

三、ペリー来航後の松陰

江戸遊学中の松陰は、ペリー艦隊が六月三日浦賀に入港したことを知り、六月六日の早朝、浦賀に急行した。異国船をまのあたりにし、その様子を細かく記録している（「癸丑遊歴日誌」）

当時の松陰は、ペリーの開国要求を幕府は拒否すると判断しアメリカとの一戦は避けられぬと考えた。その対策を藩主毛利敬親に上書したものが「将及私言」（撰集㉒）と「急務条議」「海戦策」「急務策」「急務則」の四篇である。

これらは、「攘夷戦」に対する対策である。兵学者松陰は、戦術の基本を「孫子」に求めているが、「敵を知り、己れを知れば百戦あやうからず」（孫子㈢「謀攻」）のとおり、外夷の状況を全ゆる手段を通して入手しようとした。「飛月長目」（情報収集活動）であった。

四、「幽囚録」（撰集㊴）

松陰の異国観及び対外政策の基本的な考え方は、安政元年（一八五四）野山獄中で執筆した「幽囚録」に詳述されている。

この中で、松陰は海外渡航（下田踏海の挙）の目的を「海外文明の摂取及び日本の窮状を救うため」と言い、師佐久間象山が、幕府に海外留学生派遣を上申したが、実行されたのを知り、「予が航海の志、実に此に決す」と誌している。

次に列強の日本進出に対し、国内防衛策を列挙している。その主たるものは、

①西洋の兵法を積極的に摂取―兵学校を設置し、「方言科」（外国語科）を設け、外人教師を招く。また海外に数年間の留学生を派遣する。

②軍艦の建造・海軍充実策の実施。

③アヘン戦争・太平天国乱を教訓に、日本の危機への対応が急務だと強調。

④海外進出・アジア進出策―富

国強兵と海外情報収集を兼ねて広く世界に進出すること。

安政元年（一八五四）時点での松陰は、「攘夷」から「条件附開国論」へと考えを進めた。

外国の強要に屈しての開国では対等の外交ではない。自主独立の日本国家を維持しながらの開国を考えていたのである。

「幽囚録」に誌されているアジア進出策を第二次大戦までの日本のアジア政策の原型だとする人がいるが、それは間違っている。松陰の国際認識は、安政三年を境に大きく変化する。

西欧列強の植民地化政策の実態を情報として収集する中で、単純な外国領土の拡大策は松陰の文章からは姿を消して行く。

五、日米通商条約の締結

安政五年（一八五八）当時の幕政最大の懸案事項は、日米通商条約の締結と将軍継嗣問題であった。

幕府は前年よりハリスと交渉を重ね、「自由貿易及び横浜・長崎・新潟・兵庫の開港、江戸・大阪の開市」などを内容とする条約草案について合意に達していた。

幕府は反対派を抑えるため、事前に朝廷及び諸大名に条約草案及び安政四年十月二十六日、老中堀田正睦邸でのハリスとの交渉経過（「対話書」）をまとめたものを示し、大名の意見を聞いた上で勅許による条約調印を実現しようとした。

当日、ハリスは、六時間にわたり、条約調印の必要性を力説したといわれる。「ハリス日本滞在記」（下巻八十六頁～九十一頁参照）に当日の様子は詳述されている。

然し、老中堀田正睦の努力も空しく、安政五年三月二十日、朝廷は条約調印の勅許を与えず、再度、諸大名の意見を聞いて上奏せよとの結論を出した。

幕府は、予期に反し、条約勅許が不成功に終ったので、二つの懸案事項の解決を図るため、四月二十三日、南紀派の頭目であった彦根藩主井伊直弼が大老に就任し、六月十九日に日米通商条約を勅許をまたずに調印し、将軍後継者も一橋派（慶喜）を排し紀州藩主徳川慶福に決定した。

この前後の松陰の対外政策論は、「狂夫の言」（撰集㊺）「対策一道」（同㊿）「愚論」（同㉒）「続愚論」（同㉓）「時勢論」（同㉚）に詳述されている。

これらは、開国による海外進出で、国力を充実する必要を力説しながらも、アメリカの自由貿易政策は、日本の植民地化の危機につながるとし、幕府の屈辱的開国を批判したものである。

ハリスと幕府の通商条約締結交渉を批判した松陰の文書の中に「丁己（安政五年）十月二十六日堀田備中宅（正睦）にて墨便（ハリス）申立の趣論駁條件」（松陰全集四巻439頁）がある。

これは、幕府が諸大名の諮問を得るために示した条約草案とハリスとの「対話書」の写しを周布政之助を通じて入手した松陰が、安政五年十一月に野村和作を通じて大原重徳に上書しようとしたものであった。

安政四年十月二十六日、堀田邸でのハリスの説明要旨は、

①近くイギリスの大艦隊が中国問題（アロー号戦争）を片づけて、日本に通商を求めて来航する。

②それ以前にアメリカと通商条約を結べば、戦争を回避するようにアメリカはイギリスを説得する。

③アメリカの要求する通商条約は、自由貿易と公使の江戸駐在、開港場の増加である。

松陰は「対話集」を読み、次の様な反論を加えた。

①「アメリカは領土拡大の意を持たず（モンロー宣言）日本と友好互恵を願う」というが、米墨戦争（一八四八）でニューメキシコ、カルフォルニアを併合しているではないか。海外領土を未だ領有しないのは国力不足による。領土的野心は必ずあるから注意が必要。（後にハワイ・フィリピンを併合）

②「公使の江戸駐留」は拒否すべし。アメリカの貧民対策は巧妙だから、日本を混乱におとしいれる。

③「自由貿易」は不可である。その弊害は亡国の危機をもたらす。

④「清の覆轍をいって日本に自由貿易を迫る」が、アヘン戦争とアロー号戦争をアメリカは止められなかったではないか。「アヘンの密貿易」を日本でとめられるか。

⑤「日本は二百年来の太平になれ武備が弱い」これは事実である。しかしその言は日本を侮っている。「死せる器機は活ける勇気に如かず」

⑥「交易の便利（有効）を説いた論」には当然のものもあるが師佐久間象山のいう「出交易は可なり。居交易は不可なり」である。

日本の国力が充実してくれば居交易も出交易も可であるという自分（松陰）の説に象山は同意している。

最後の章「附論三則」で西欧列強のアジア進出の状況を次のように説明している。

「魯夷（ロシア）、満州・支那を窺ひ、勢将に暗（イギリス）の印度に逼らんとす。暗は乃ち払（フランス）と謀り、吾が蝦夷・唐太を取りて、遙かに対持の勢を張り、且つ仏と朝鮮・台湾を分領し、近く其の吭を扼し、其の角を折らんと欲す」

「若しも英・仏がこの計画を実現すれば、米はアジアの領土を実現できない。日本はそのこころみにされている」とし、植民地化の危機を強調しているのである。

野山獄及び杉家幽閉中の松陰は、行動の自由を奪われながらも、周布政之助をはじめとする多くの友人や松陰門下生たちを通じ、可能なかぎりの情報を収集し、西欧列強の植民地化政策に対し「日本は今、何をなすべきか」を考え続けたのである。

「生きる力」と松下村塾

松陰研修塾基礎・自主研究コース
長門高等学校
教諭　吉田栄次郎

一、はじめに

現在、我が国日本は、これまで経験したことのない未曾有の時代を迎えている。日本社会で凄まじい勢いで少子・高齢化が進み、グローバル社会のなかですべての障壁を取り払ったボーダーレス化、そして情報化の流れが進行中である。

このような未曾有な大変革の時代に生きている私達教育者は、正しい時代の方向性を子どもたちに示してやる責務を怠ることなく、新しい時代のコンセプトの中で教育の再構築作業に全力で取り組む時であろう。古の賢人が「温故知新」という故事成語で教えてくれているように、日本の歴史の中にも、大きな時代のうねりの中でも正しい方向性を示しながら、その時代と共に殉教した偉人がおられる。その方こそ私達が敬慕している吉田松陰先生ではなかろうか。

二、飛耳長目

松陰先生は、塾生たちによく、「飛耳長目」ということを教えられた。正しい時代の情勢をつかむためには、あらゆる情報が必要である。そして、それを分析し、将来への見通しをたてる。これは、科学的な方法であり、現代にも通用する。

「先生の国事に尽力せらるるには、天下の同志知己または門人の各地に遊歴する者と、互いに風説事情細大となく通報し、之を『飛耳長目』と題する書冊に編纂せり。故に身一室を出ずして、京坂江戸その他各地の形勢を詳悉し、従って之が画策を施さる」（天野御民）

「塾には『飛耳長目録』というものありて、今日の新聞様のものが書き綴りしものである。主に交友または上方より来る商人などの談によれり」（渡邉高蔵）

国内の動きや外国との条約交渉の経過等あらゆる情報が、日々書き加えられた。江戸から帰ってきた藩士から聞いた話、諸国をまわってきた商人その他、松陰先生のもとに集まる情報を書き綴ったもので、いわば塾内新聞である。

「耳を飛ばし目を長くして、出来るだけ多くの情報を入手し、将来への見通し、行動計画を立てなければならない」と、松陰先生は塾生たちに情報の必要性を説いた。松陰先生自身、自由なころはよく旅行している。通信機関の未発達なこの時代、山陰の一隅に座っていたのでは、情報は得られない。自分で出かけて集めるしかない。時勢の動きを把握し、行動を決定するために必要な情報収集は、切実な課題であった。

三、「生きる力」と松下村塾の理念

平成八年七月公表された、第十五期中央教育審議会第一次答申「二十一世紀を展望した我が国の教育の在り方～子どもに〈生きる力〉と〈ゆとり〉を～」の中の項目において次のような記述がある。

教育においては、どんなに社会が変化しようとも、「時代を超えて変わらない価値のあるもの」（不易）がある。

豊かな人間性、正義感や公正さを重んじる心、自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心、人権を尊重する心、自然を愛する心など、こうしたものを子供たちに培うことは、いつの時代、どこの国の教育においても大切にされなければならないことである。

また、それぞれの国の教育において、子供たちにその国の言語、その国の歴史や伝統、文化などを学ばせ、これらを大切にする心をはぐくむことも、また時代を超えて大切にされなければならない。我が国においては、次代を担う子供たちに、美しい日本語をしっかりと身に付けさせること、我が国が形成されてきた歴史、我が国の先達が残してくれた芸術、文学、民話、伝承などを学ぶこと、そして、これらを大切にする心を培うとともに、現代に生かしていくことができるようにすることも、我々に課せられた重要な課題である。

我々はこれからの教育において、子供たち一人一人が、伸び伸びと自らの個性を存分に発揮しながら、こうした「時代を超えて変わらない価値のあるもの」をしっかりと身に付けていってほしいと考える。

しかし、また、教育は、同時に社会の変化に無関心であってはならない。「時代の変化とともに変えていく必要があるもの」（流行）に柔軟に対応していくこともまた、教育に課せられた課題である。

以上のように、我々はこれからの子供たちに必要となるのは、いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性である。

「生きる力」は、全人的な力であり、幅広く様々な観点から敷衍することができる。

「生きる力」は、単に過去の知識を記憶しているということではなく、初めて遭遇するような場面でも、自分で課題を見つけ、自ら考え、自ら問題を解決していく資質や能力である。これからの情報化の進展に伴ってますます必要になる、あふれる情報の中から、自分に本当に必

要な情報を選択し、主体的に自らの考えを築き上げていく力などは、この「生きる力」の重要な要素である。

平成八年以上のような答申が内外の有識者を集め、答申としてこれからの目指すべき目標としての教育的姿が、示されたわけであるが、歴史的にはすでに百三十年以上も前に、松下村塾において、最もリアルにかつ実践的に行われていた事実を検証して行くべき時ではないかということを痛感する。確かに、当時と現在とでは、時代も規模も環境もまったく違うものであるが、今松陰先生が生きておられればいかにこの閉塞した日本の社会環境（政治・経済全てを含む）そして特に教育環境に対して、対処されるかを考えることは私たち現場の教育者にとり、とても大切なことのように思えてならない。

四、教師としてのあるべき姿

四―一「妄りに人の師となるべからず」

松下村塾で松陰先生が教えたのは、二年余り、実際に看板を掲げてから閉鎖されるまでは一年ばかりの期間であったから、純粋に学問というか、教え込んだ知識の量はそれほどのものではない。松陰先生が教えたものは、人間としての基本的な物の考え方、すなわち、考える力（「生きる力」）を与えようとした。

新しく入ってくる人には、最初に必ず「君は何のために学問をするのですか」と質問した。その答えを、時間をかけて見つけられるように導いていく、それが松陰先生のやり方であった。現代の教育が手段であるはずの知識を、あたかも目的であるかのように求めている有り様に対して、村塾の教育は、実学的・主体的・創造的・人間的な面に重点がおかれた。確かに教育は、学んだ知識よりも、それを駆使して創造的・主体的に自らの人生を切り拓いていく力を培うところにこそ、より重要な意味がある。

松陰先生は学問を始めるに当って、心構えが大切であると説いている。つまり、学問をなすものの心構えもいろいろあるが、中でも誠心道を求めるは、上であり、名利のために学問をするは下であるとしている。

教育は、自分の存在そのものを通して、人格を顕現できるものでなければならない。松陰先生は学ぶ楽しさと学ぶことによって陶冶されていく快さ等を、弟子たちに経験させたかったからである。また、修己は、死して悔いない生を全うするためであり、死に際し後悔の念を起こさせないようにするためであった。

教育とは、学習内容を忘れてしまった後に何を残すかということである。つまり、獲得された知識よりも、それを獲得する過程において人間が育ち、能力が伸び、心が育って行くところにこそ教育の奥義があるのではなかろうか。

寸時も止むことなく厳しい学問を重ねてきた松陰先生の内面からは、血気盛んな若者たちを強く引きつけ、その純なる魂を躍動させずにはおれないような誠実な人間性や深い識見がよどみなく湧き出ていた。それ故に、松陰と触れ合った人は、たとえその期間が短くても、強烈な感化をうけていった。

四―二「妄りに人を師とすべからず」

松陰先生は個に応じた目標を持たせると共に、万人共通の努力目標も掲げ、その目標にむかって努力させた。その共通目標は「読書と勤労」であった。ただ、働くばかりで読書しなければ、適切な判断に基づく行動の方向がつかめない。また、読書ばかりして勤労を軽視したのでは、机上空論の学問になり実用に乏しくなる。このことは、村塾の床柱に掲げられ座右の銘とされた。

「万巻の書を読むに非ざるよりは、寧んぞ千秋の人たるを得ん。一己の労を軽んずるに非ざるよりは、寧んぞ兆民の安きを致すを得ん」

学問の他に勤労が非常に重視され、学習活動と生産活動が一体となって展開された。これは、塾生に体を動かして物を生産・創造したり、汗を流したりすることが、人間に如何に充実感を与えるかを感じとらせると共に、知識万能を戒めさせるためであった。

現代の教育は、知識の渦の中で一人ひとりの人間が失われ、目標が定まらず無気力な人間を生産している。現代の教育で真に育てなければならないのは、学習する力の要因となるものでなければならない。「生きる力」との関連性を十分に吟味しなければならない。このように考えてみると、現代声高く叫ばれている全ての問題の解決は、松下村塾の教育の中で実践されていたことに驚きを感じずにはおれない。

松陰先生の教育が当時の教育の中で異彩を放っていた点は、名利に陥らず常に現実に根ざし、現実と直結していたところである。読書をするときも、自らその中の主人公になったつもりで読ませ、「これは昔のことだが、今だと君ならどうするか」と常に現実の問題と結び付けて考えさせた。村塾の教育では、この心を練ることが何より大切なねらいであった。

四―三「全力投球」

松陰先生の真価は、幕末変革期の課題を自分自身の課題として、それに真正面から取り組み、自分の直面している問題に全力投球をしてぶつかっていることである。翻って私自身の教員生活は今年で十五年になるが、時代の問題に全力で取り組み、全身全霊を込めてそれに対処した経験は無きに等しい。時代はまさにグローバル世界の中で大きく変わろうとしているが、深く反省しなければならない。

松陰先生の学問は実践につな

がり、実践はまたその学問を高めた。そうした彼の魂の燃焼が多くの有能な弟子を育てた。それを結果から見て教育者などというとらえかたでは、真の松陰像とは程遠いものとなってしまう。時代の課題に自分の全てをぶっつけ、真剣に前向きに解決していく松陰先生を今一度深く学ぶ必要性を感じている。

四―四　「荒れる学校」

今、現場の学校では、これまでの経験だけでは、子どもたちの行動を予測できない、あるいはどう対処したらいいのかわからない事例が連日のように起こっている。子どもたちは、高度情報化社会と価値観の多様化の中で、刻々と変化している。むしろそれに追いつけないのは、我々大人社会、特に教育関係者なのかもしれない。子どもたちが学校に不適応になっているのではなく、学校という組織自体が再構築しなければ存在意義がなくなる状態にまで追い込まれているのかもしれない。この問題の背後にあるのは、画一的な偏差値教育・受験一辺倒教育に対する子どもたちのうめきであることは間違いない。

「犯罪は社会が抱えた病理の反映」と言われている。子どもたちが生きる目的もわからず荒れている。また、学校教育においても人間にとって最も大切なことは教えずに知識偏重教育が蔓延している。これまでのつけが今まさに噴出している状態であるので、このままの教育システムで行くならば、これからは、予測のつかない大きな問題が学校教育全体を襲う危険性は十分にあると思えてならない。

環境教育の標語ではないが、『Think Globally, Act locally.【地球規模で考え、足元から行動せよ】』が、教育者としての私が松陰先生の教えの中から導かれる行動の規範である。これから時代がどのように変ろうとも、子どもたちの中に本来備わっている長所を発見しそれを褒め、相労役の中で子どもたちと一緒に学び続けていく姿勢だけは忠実に保持していきたい。そのような教育者一人一人の心構えの集積が、この閉塞している教育環境打破の突破口になることを信じて日々の教育実践にあたりたい。

至誠而不動　者未之有也

主題　松陰教学の真髄に学び　明日の教育を拓く

主催・主管　財団法人　松風会

共催　山口県小・中学校長会
山口県高等学校長協会
財団法人山口県教育会

松陰研修塾

平成3年6月　開設

開講あいさつ (財)松風会　松永祥甫理事長

後援　山口県教育委員会
山口県市・町村
教育委員会協議会

研究課程　三ヶ年在塾毎年四回

中心資料　吉田松陰撰集
山口県教育史
孟子　別途補助資料

第一回松陰研修塾自主研究コース

―第二年次研修はじまる―　第一回　五月二十三日

講孟余話　河村太市先生

文献解題・講孟余話　石原啓司先生

発表「生きる力と飛耳長目」吉田栄次郎塾生

塾生の受講風景

これからの学校教育と吉田松陰の教育

松陰研修塾基礎・自主研究コース
周東町立周北小学校
校長　新谷剣二郎

一、はじめに

現在、教育現場では、子どもたちの主体性・体験の欠如、自立の遅さ、いじめ、不登校、凶悪化・低年齢化する青少年非行、果ては学級崩壊といわれるような状態等、難しい問題が山積みしている。その解決のため、学校教育において、これまでの知識偏重、横並び重視の指導を是正し、一人一人の個性を尊重する教育を進め、人間性豊かな、真に「生きる力」を身につけた子どもの育成への取り組みが急務となっている。

そのためには、個々の学校が児童・生徒の実態や地域の特性を生かし、その独自性を発揮しながら取り組む必要がある。

幸い本県においては、百年以上前、身分を問わず広く門戸を開き、個々の個性を生かし、学ぶ心を奮い立たせて多大な成果をあげた吉田松陰先生の教学という手本がある。その教えに目を向けて今日の学校教育に通じるものを考えてみたい。

二、学校教育の目指すところ

現行学習指導要領では、新学力観に基づく目標として、

①心豊かな人間の育成
②基礎・基本の重視と個性教育の推進
③自己教育力の推進
④文化と伝統の尊重と国際理解の推進

の四項目が示されている。

それを受けて本県では、それまでの「心の教育、情の教育」の基礎の上に平成八年度からは、県学校教育の基本方針として「夢と知恵を育む学校教育」を掲げ、その実現に向けて二つの中心目標と四つの具体目標を定め、各学校がその実現に向け取り組んでいるところである。さらに、今年度からは、県独自の教育改革、教育の活性化を県勢振興の重要な柱として「夢と知恵を育む教育の推進」を基本目標とした「山口県教育ビジョン」を策定し、各学校においても「三つの力」、「三つの心」の教育を視点に目標達成に向けた強力な取り組みが求められている。

また、平成十四年度の改訂に向けた、教育課程審議会の審議のまとめにおいても、「生きる力」を育むため、「体験的な学習重視」、「学び方の育成」、「教わる教育から自ら学ぶ教育への転換」等々が強調されている。

三、県の具体目標と松陰教学の係わり

学校において「夢と知恵を育む教育」を推進していくためには、中心目標を支える具体目標の具現化が重要なこととなる。その手がかりとして、具体目標に通じる松陰先生の教えをいくつか挙げてみた。

「個性の伸張を図る」

○野山獄・松下村塾の講義における至誠、個性にあった全人教育、待ちの姿勢、行動重視、失敗も認める姿勢等々

・人賢愚ありと雖も各々一、二の才能なきはなし……「福堂策」
・人を観る者、過に於いて俄に之を棄つべからず……「未忍焚稿」
・気類先ず接し義理従って融る……「諸生に示す」
・記聞の学は以て師となるに足らず……「講孟余話」
・志定まれば気さかんなり……「幽室文稿」
・一の養の字を深く味ふべし……「講孟余話」
・胸中の正不正は眸子の瞭眊にあり……「講孟余話」
・経書を読むの第一義は聖賢に阿ねらぬこと要なり……「講孟余話」
・聖とは私欲消盡して天理純全なるの名なり……「講孟余話」
・聖賢の貴ぶ所は、議論に在らずして、事業に有り…「久坂生の文を評す」
・涵育薫陶……「講孟余話」
・真骨頭（頂）……「思父を詰る」
・杉蔵往け……「杉蔵を送る叙」
・萬巻の書を読むに非ざるよりは、寧んぞ千秋の人と為るを得ん
　一己の労を軽んずるに非ざるよりは、寧んぞ兆民の安きを致すを得ん
　……「松下村塾聯」
・道は吾が身に存す……「講孟余話」
・初一念……「講孟余話」
・意を決して之を為す……「回顧録」
・至大至剛……「講孟余話」

○塾での、学科だけでなく操行を入れた励みを持たす組分け　（三等六科）

○見かけに左右されない目……「市之進に贈る」
・徳は孤ならず、必ず鄰有り……「野山獄文稿」
○生涯学習につながる姿勢
・読書尚友は君子の事なり……「士規七則」
・学は人たる所以を学ぶなり……「松下村塾記」
・十歳中自ら四時あり……「留魂録」
・凡そ人は源あるの水をもって志とすべし……「講孟余話」
・学問の大禁忌は作輟なり……「講孟余話」

「思いやりの心を涵養する」

○護送中や獄中での金子重輔との交わり……「金子重輔行状」
○杉家の家風、母たき子の背中の教育、妹千代への書簡
・親思ふこころにまさる親ごころ……「父叔兄宛」
・心を養ふは寡欲より善きはなし……「講孟余話」
・杉の家法に世の及びがたき美事あり……「妹千代宛」
・正を以て正しきを感ずる……「妹千代宛」
・凡そ人の子のかしこきもおろかなるもよきもあしきも、大てい父母のをしへに依る事なり……「妹千代宛」
○九州遊歴中における弟のための清正公廟参拝……「西遊日記」
○東北遊歴時の虐待されるアイヌ民族や金掘り人足への目……「東北遊日記」
○野山獄における教化・囚人釈放運動……「福堂策」
○松下村塾での教育
・情の至極は理も亦至極せるものなり……「講孟余話」
・和気藹然、擯するに餘りあり……「講孟余話」
・至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり……「小田村伊之助に与ふ」
・各々その心を心として相交わる。これを心友と謂う……「黙霖宛書簡」
・至公至仁……「講孟余話」

「たくましく生き抜く力を育てる」

○実学重視の修行、抄録を取り入れた広く深い読書
・此の日再びし難く、此の生復びし難し……「幽室文稿」
○獄中・松下村塾の教育―志・実学・実践・師弟同行の重視
・志を立てて以て万事の源と為す……「士規七則」
・堅忍果決……「士規七則」
・あに桃李に伍して、松柏に咲はれんや……「講孟余話」
・氣節行儀……「野山日記」
・天下に機あり、務あり。機を知らざれば務を知ること能はず「獄舎問答」
・境順なる者は怠り易く、境逆なる者は励み易し……「講孟余話」
○目的意識を持った諸国遊歴と観察眼
・飛耳長目……「周布公輔に与ふる書」
・心はもと活きたり、活きたるものには必ず機あり……「西遊日記」
・發動の機は周遊の益なり……「西遊日記」
・卓然自立……「東北遊日記」
・天下の大患は、其の大患たる所以を知らざるに在り……「幽室文稿」

「ふるさとを愛する心を育てる」

○松下村塾の教育、村塾記等に見られる意気込み
・誓って神国の幹とならん……「村塾の壁に留題す」
・今松下は城の東方にあり。東方を震と為す……「松下村塾記」
○国を思い、正しいと信じていることの上書提出
○師の指導の実践…山鹿素行…基礎として日本の歴史・よさを学ぶ姿勢
…山田宇右衛門…国内にとらわれず広く海外へ向ける目
…佐久間象山…海外渡航の実践
○毛利氏の勤王の精神、父親の訓育しつけ、毛利の臣としての意識
・国を去りては看るに忍びんや　故国の山……「長崎紀行」

※○印は県の四つの目標に係わると思われる松陰先生の具体的実践
・印は『教育実践』誌「松陰先生に学ぶ」に挙げられている著名な言葉

四、実践に向けて

具体目標に沿って松陰先生の教えをみたとき、目標を持つことの大切さや教わるのではなく学ぶことの大切さ（志）、相手を一人の人間として信頼し期待することの大切さ（至誠）が全体に流れていることを理解できる。この底流となっているものは、まさに今の学校教育に求められていることそのものである。子どもたちの「生きる力」を育て、目的を持って生涯学び続けようとする姿勢を育む山口県らしい憤排啓発の学校教育を進めていくためにも、松陰先生の教育、言動を学び、今後の教育活動に生かしていくことは大変有意義なことと考える。

また、その実践は内容の重要さに鑑み個々の教師が自己の考えで対応するに止まらず、校内の共通理解のもと全校挙げて組織的・系統的に行われることが効果

的であると考える。

そのためには、著作、書簡に直接触れ、自分なりに消化して実践につなげていくことが重要であるが、その際、一つ一つの著作・書簡に込められている先生の思想、人間性、実践、先見性を学びとることはもちろん、それが書かれた時代の背景、同時期の著作や書簡、周囲の師や弟子の思想・言動をつかみ、松陰教学の源流及び影響を総合的に考えていくことも必要である。松陰教学は卓越した個人の力で単発的に現れたものではなく、防長教育の基礎の上に立つものだと考えるからである。この大きな流れと時代の要請とをマッチさせることも重要なことではなかろうか。

五、おわりに

松風会主催の松陰研修塾に参加でき、松陰先生の教えの一端に触れる機会を得たことで、子どもを見ようとすることの大切さ、待つことの大切さ、自身が常に伸びようとすることの大切さ等教師としての姿勢、さらには一個の人間としての生き方等々学ぶべき事の多さを痛感した。今回、具体目標との係わりという面から考えてみたが、今後更にこの点を整理するとともに、著述に触れる研修を続けることで百数十年前に実践されたすばらしい教育の中から不易である部分の大切さを理解し、教育の原点に立ち返って、明日からの実践につなげていきたいと考えている。

『西遊日記』に登場する人々

第一回松陰研修塾自主研究コース
美和町立下畑小学校
校長　藤井武政

◇遊学期間
嘉永三年八月二十五日～同年十二月二十九日（百二十三日）

◇主な場所
①馬関　②佐嘉（佐賀）
③柳川　④長崎　⑤平戸
⑥天草　⑦島原　⑧熊本

①馬関（8／26～29・12／28）

●伊藤木工助（木工之助）…熱を出し三日間泊めてもらった。帰路12／28にも立ち寄っている。

●尾崎秀民…医師。大分県人。帆足萬里に学ぶ。発熱がひどくなり、8／27・28に診てもらった。その折、半日談話している。

●帆足萬里…大分県速見郡日出町の人。日出藩学教授。また家老経世的儒者で多くの著述がある。8／27・28に著作「東潜夫論」「八学許論」を読んでいる。

②佐賀（9／2・12／20～24）

●武富文之助…佐賀藩士。初め中村嘉田に就て学び、後江戸に赴き古賀伺庵の門に入る。帰国後弘道館教授。諸生を教えること二十五年。廃藩後東京に住む。松陰はこの旅で二度訪ねているが9／2は不在だった。

●佐々木　操…対馬の人。歌よみ風の人。9／2に杵島郡江北町の宿で同宿した。

●千住大之助（代之助）…佐賀藩士。天保元年肥後に遊学し、帰国後藩校指南となる。元治元年御側頭兼目附。在職三十二年余藩主の信厚く、要職に就き貢献する所大。12／21・22に訪ねている。

●吉田良一…武富文之助の門下生。帰路12／21に武富を訪ねた時、武富は不在だった。その折、語り合った。

●中山平四郎…帰路12／22に松陰が訪ねた人。

●永松玄洋…帰路12／23に痛かった足を治療してもらった人。醫。

③柳川（12／14～20・24・25）

●石橋卯八郎…12／18に訪ねた人。12／25にも会っている。

●町野、可名生…12／19に松陰を訪ねて来た人。

●森　恵三郎…12／24・25に訪ねた人。

④長崎（9／5～11・11／8～12／1）

●清水新三郎…長州藩邸役人。蘭船の出入、海外異聞の報告役。

●郡司覚之進…明倫館の砲術教官。石川市三助と共に砲術稽古の為に六月より長崎に来ていた。

●高島浅五郎…砲術家。幼少より父四郎太夫（秋帆）より西洋砲術を学ぶ。長崎滞在中松陰は度々訪問している。

●高島四郎太夫…家世々長崎の町年寄。長じて長崎会所調役頭取。私財で大砲を輸入研究。江戸徳丸原で洋式教練火技を試演幕府講武所砲術師範役となる。

●坂本天山…信州の人。荻野流砲術の大家で晩年は長崎で砲術を教授。9／6松陰は墓に参詣。

●中村仲亮・阿部魯庵・西慶太郎…9／7松陰が訪ねたが不在。中村には十一月の滞在では泊めてもらったり、度々行動を共にしたりしている。

●山縣三郎太夫…平戸藩聞役。

●吉川俊蔵…平戸藩御用商人。

●豊嶋権平…信州高遠藩の人。坂本天山の推薦により平戸藩に仕え、天山流砲術師範。海外事情に通じ、松陰を啓蒙した。

●三宅緝明（しゅう）…9／8著書を読む。

●大木藤十郎…坂本天山、高島秋帆に従って砲術を修める。度々訪問。嘉永六年にも訪ねた。

●武井茂四郎・中村儀三郎・吉村年三郎…9／10松陰が訪ねた人。

●福田耕作…9／11通訳某氏と共に松陰を蘭船に案内した。

●後藤亦次郎…11／9に松陰が訪ねた人。

●中島熊太郎…11／10に松陰が訪ねた人。

●服部南部…柳沢候に仕え、後江戸に塾を開いた。儒者。文人牛島に借りた「南部文集」著者。

●古賀穀堂…佐賀藩儒・精里の長子。伺庵の兄。後藤に借りた「穀堂遺稿抄」著者。

●鄭勘介（幹輔）…帰化した中国人で通訳。長崎滞在中松陰は度々訪ねて、大きな益を受けた。
●隣辰…11／15に中村仲亮と共に沿岸砲台を見て回った人。
●堀江荻之助…11／19に訪ねた人。徳島県人。帰路柳川で再会。
●十時喜兵衛…11／23に訪ねた人。柳川藩聞役。
●山縣三郎太夫…11／23に訪ねた人。平戸藩聞役。
●佐藤謙太郎…11／25に訪ねた人。広瀬淡窓の門人。
●魯範二郎…11／26に訪ねたが不在だった。

⑤平戸（9／14～11／6）

●葉山左内…平戸藩の家老職。十七才で江戸に出て佐藤一斎の門に入り、後藩主の傅となる。万延元年藩主に従って江戸に行き執政の要職に抜擢される。松陰は平戸滞在中度々訪ねている。
●山鹿萬介…平戸藩家老。山鹿流兵学の宗家で、学祖山鹿素行の嗣子高基の家統を継ぐ。松陰は、平戸で萬介の門に入った。
●野元辨左衛門…9／15葉山邸で会う。
●縣駿太郎…9／16に訪問。
●澤村彌三兵衛…9／18山鹿萬介への謁見の周旋をしてくれた。
●桑山助之進、山崎木工助、天野勇衛…9／18に山鹿邸にいた門人。
●池内貞吉…9／18萬介の家来。
●縣芳三郎…9／18一緒に山鹿訪問。
●岡口等傅、片山兵衛…9／19に訪問。
●本澤斧之助、一瀬才八郎…9／22縣たちと共に萬介の講義受講。
●妻木士保…名は忠順。字は士保又は子方。天保十一年松陰兵学に入門。山鹿流兵学に最も熱心な人。馬関戦争に従事。後病没。9／28「経世文編抄乙集」を読んでいて思い出した人。
●山縣半蔵…松本村安田直温の第三子。幼名を辰之助名を子誠。松陰等とともに玉木文之進の塾に学ぶ。嘉永元年山縣大華の養子となる。天保十四年松陰の兵学門下。慶応元年宍戸備後介と改名し、広島にて幕府軍との接渉にあたる。維新後、要職につく。9／28読書中に思い出した人。
●浅野小次郎…萩の門下生。9／28読書中「阿芙蓉異聞」等に思い出した人。
●深江玄三●辻川省吾…10／2発熱病床の松陰を見舞った人。
●田村某…10／19に訪ねた人。
●松浦求馬…10／27に訪ねた人。蔵人の嫡子。家老の位。
●松浦右膳…10／27に訪ねた人。壹岐の城代小倉衛守と同役。
●稲津助五郎…10／28に訪問。順講。
●安藤庄兵衛●原半平●澤村兵内…10／29に訪ねた人。
●片山某…11／3に訪ねた人。

⑥天草（12／1～2）

●江間久右衛門…12／2に天草富岡で訪ねた人。

⑦島原（12／3～9）

●宮川源之助…12／3島原有江鉄砲町で訪ねた人。
●宮川度右衛門…12／4島原有江で訪ねた人。
●生駒勝助…12／4に訪ねた宮川度右衛門の所に来た人。甲州流真田派の兵家。
●豊島喜左衛門…12／5・6宮川の所に訪ねてきた人。医者もできる。

⑧熊本（12／9～13）

●池部啓太…家世々数学（天文測量・暦・算）師範。幼少より測量を、天文を末次忠助、砲術を高島四郎兵衛及び四郎太夫（秋帆）に学ぶ。砲術師範を兼ねる。天保十四年、高島秋帆の事に座して三年江戸藩邸に幽せられる。松陰が熊本でまず池部を訪ねたのは、秋帆の子、浅五郎によるものか。池部は当時五十三才。学識は天下に轟き、著書も多い。宮部鼎蔵を松陰に紹介したのはこの人である。池部はその後、藩の砲術指導者として国事に奔走し、大きく貢献した。
●荘村右兵衛…12／10に池部を訪ねて来て話す。萩へ行って勉強したいとのこと。
●池部彌一郎…池部啓太の子供。熊本滞在中度々共に行動。
●宮部鼎蔵…肥後益城郡田城村の人。家は世々醫だったが、その職を望まず、伯父増実に就き山鹿流兵学を受け養子となる。嘉永の頃より、横井小楠と共に青年志士の領袖となる。嘉永三年のこの遊歴で会ってより、松陰と刎勁の交を結ぶ。嘉永四年松陰江戸遊学の時は共に山鹿素水の門下に入る。房相漫遊、東北遊を共にし、嘉永六年の長崎行の時も立ち寄っている。その後松陰と京都、江戸で活躍。松陰死後、一時国にあるも同志に乞われて国事に奔走する。元治元年、吉田稔麿と京都池田屋に密談中、新撰組に襲われて死亡。
●義堂…12／13久留米南関町で同宿した久留米の黄蘗僧。萩の東光寺に長く留学したという。

あとがき

八月四日（陽暦九月二十日）は、松陰先生が、天保元年（一八三〇）長門国萩松本村護国山の麓、団子岩の地に御生誕の佳き日である。

また、嘉永三年（一八五〇）八月二十五日には、九州遊学の途につかれている。

このような事に因んで、「松陰ゆかりの地西九州長崎・平戸巡検」を、八月十七・十八日と実施する。同行三十六人。

企画・実施に当たっては、長崎歴史文化協会・長崎史談会・(財)松浦史料博物館・山鹿万介先生御遺族経営の平戸観光株式会社等々の御協力・御支援を受けている。関係の方々に御厚謝申し上げる次第である。